

研究ノート

障害がある人のきょうだいが各ライフステージにおいて経験する 困難と支援方法

黄亨黙¹・中山慎吾²

The Challenges Experienced by Siblings of Persons with Disabilities at each Life Stage and Support for the Difficulties

Hyeongmook HWANG¹, Shingo NAKAYAMA²

キーワード 障害がある人のきょうだい, ライフステージ, 困難に対する支援, きょうだい支援

Keywords: siblings of persons with disabilities, life stages, support in handling challenges, sibling support

1. 研究目的と研究方法

兄弟姉妹関係は、人のライフステージ全体の中で最も長く続く関係の一つである。障害者（以下、同胞）とその兄弟姉妹（以下、きょうだい）は影響を与え合い、また、同胞にとってきょうだいは重要な役割を担っていると推察される。

Yang and Shin (2015) の研究によれば、同胞のきょうだいは、成長の過程で成熟の機会を多く持ち、自我意識や社会的能力、洞察力、忍耐心、誠実さなどを育てることができ、責任感や利他心が強く、個人差に対して共感的である。きょうだいはこれらの特性を身につけるに至るまでは、複雑な一連の過程を経験する。

Yang and Shin (2015) がいう複雑な一連の過程の中で、きょうだいは親や障害のある同胞と同様に悩みを持ち、大きな負担を負っている。にもかかわらず、同胞と親に支援が集中し、きょうだいへの支援が不足している現状にある。本研究は、先行研究に基づき、きょうだいが同胞とともに育つ過程の中で、各ライフステージにおいて経験する困難について検討し、また、それらの困難に関してどのようなきょうだい支援がなされるのかを考察することを目的とする。

本研究で用いる用語の定義としては、障害のある兄弟姉妹を「同胞」とし、その同胞の兄弟姉妹である健常者を「きょうだい」と表記する。なお、成人の障害者も未成年の障害者も含めて「障害者」と表記するが、未成年の障害者のみを指す際に「障害児」という言葉も用いている。

研究方法としては、はじめに、障害のある同胞をもつきょうだいに関する文献検索を行い、先行研究を収集した。日本語文献については障害（障がい）及びきょうだい（兄弟、同胞）などのキーワードを用いて CiNii Articles による文献探索を行った。英文文献については siblings (sibling) 及び disability (disabilities) などのキーワードを用いて Proquest による文献探索を行った。韓国語文献についても同様の文献探索を行った。

収集した文献から、各ライフステージにおいてきょうだいが経験する困難や支援に言及されている文献を選択し、それらの文献の研究内容の検討を行った。ライフステージとしては、先行研究を参考に「幼児期」「小学生の時期」「中学・高校生の時期」「大学・成人の時期」という区分を用いた。各文献の研究内容を比較検討し、先行研究で示されている主要な困難を整理してライフス

¹ 891-0197 鹿児島市坂之上8-34-1 鹿児島国際大学大学院福祉社会学研究科博士前期課程

The International University of Kagoshima Graduate School of Welfare Society Master Program, 8-34-1 Sakanoue, Kagoshima 891-0197, Japan

² 891-0197 鹿児島市坂之上8-34-1 鹿児島国際大学大学院福祉社会学研究科教授

Professor of Welfare Society, The International University of Kagoshima, 8-34-1 Sakanoue, Kagoshima 891-0197, Japan

2019年5月24日受付, 2019年8月26日採録

ページごとにいくつかのカテゴリーを設定した。

本稿の「2. 結果」では、きょうだいが各時期に経験する困難に関するカテゴリーを示し、説明する。「3. 考察」では、各時期に経験する困難の布置状況を踏まえて、きょうだいに対しなされうる支援方法について考察を行う。

倫理的配慮としては、先行研究を引用する際は、引用注を付して先行研究からの引用であることを明示し、研究内容を正確に反映する記述とするよう努め、著作権を侵害しないよう配慮した。

2. 障害者のきょうだいの困難な経験

2.1. 幼児期に経験する困難

きょうだいの多くは幼稚園・保育園の頃から同胞の障害を認識している（田中ほか 2011）。幼児期は家で過ごす時間が長く、発達段階の初期であるため、トラブルも多く生じうる。幼児期にきょうだいが経験する困難は、「親の接し方に関する差別」「周囲からの期待」「普通と違う」「同胞の特性による困難」というカテゴリーに区分される。

親から十分な愛情を受けて育たなければならない時期に、きょうだいは同胞の存在によって十分な愛情を親から受けることが難しい場合が多い。また、「親の接し方に関する差別」としては、Yang and Shin (2015) によれば、幼児期の子どもに対する親の接し方に関して、同胞ときょうだいでは違いがあり、親は障害のあるきょうだいの子育てに大半の時間と努力を費やし、“自分には関心と愛情を与えてくれない”ときょうだいは感じている。越智ら (2017) によると、同胞の世話のために親が忙しく、親ときょうだいの関わりが少なく、きょうだいの多くは孤独感を感じている。

また、幼児期あるいは小学生の時期からきょうだいは自分に対する「周囲からの期待」を感じ（小笠・黒澤 2014）、保護的役割（田倉 2012）を担い、多くの役割が与えられるために遊びの時間が制限されることがある（戸田 2012）。

「普通と違う」というカテゴリーに関して、小笠・黒澤 (2014) によれば、きょうだいは、同胞とうまく遊べないという思いや、同胞が他の子どもと違うという思い、同胞との関係があたり前で一般的なきょうだい関係がわからないという思いなどを感じている。また、同胞の障害による外出時の制約に対して、寂しさやもどかしさを感じている（越智ほか 2017）。

「同胞の特性による困難」に関して、例えば水内・片岡 (2015) によれば、幼児期や小学校低学年の時期に、自閉症スペクトラム障害（以下、ASD）の同胞が攻撃的だったりルールや順番にこだわりがある場合、きょうだいが身構えたり、非難されて嫌な気持ちになることがある。

2.2. 小学生の時期に経験する困難

山本 (2005) によれば、小学生の早い時期から担う“家事手伝い役”や母親が外出している間の“同胞の世話・安全の見張り役”などの役割、遊び場の制限といった“生活上の注意点”について他の子どもの状況と比較することで、きょうだい自らが“障害のある同胞のきょうだいである”という認識をもつようになっていく。小学校高学年になるとほとんどのきょうだいが、同胞の障害について理解する（田中ほか 2011、小村・本間 2017）。対人関係がほぼ家族に限られていた幼児期とは違って、小学生の時期のきょうだいは、より広い世界に接することになる。そして、同胞との関係が他のきょうだい関係とは違うことを、より明確に認識するようになる。

この時期のきょうだいが経験する困難は、「差別と羨望」「周囲からの期待」「普通と違う」「同胞の存在から起因する困難な経験」「社会の認識に対する拒否感」などのカテゴリーに分けることができる。

「差別と羨望」としては、同胞ときょうだいに対する親の接し方に関して、きょうだいは幼児期から持続的に差別を経験する（Yang and Shin 2015）。しかし、小学生の時期にはそれだけではなく、特別学級で先生が優しく、いろいろな遊び道具で遊べたり、様々な場面で特別扱いされたりする同胞を羨ましいと感じることがある（水内・片岡 2015）。

幼児期から見られる「周囲からの期待」に関して、水内・片岡 (2015) の研究では、同胞への対応がうまいという理由で、ASDの同胞のきょうだいが教員からASDとは異なる障害の生徒の世話を頼まれて困ったという体験が報告されている。

きょうだいが幼児期から感じる可能性がある「普通と違う」との経験は、小学生の時期により具体化される。先に引用（小笠・黒澤 2014）したようなきょうだいが抱く思いは、小学生の時期も持続的に経験される。越智ら (2017) によれば、きょうだいは同胞と兄弟喧嘩ができないことへの寂しさや、障害児のいる家庭といない家庭の経験の差から、友人と自分の感覚のズレを感じている。

また、「同胞の存在から起因する困難な経験」として、学校で同胞のことを話すのが憚られるなどの“友人に対する気まずさ”（越智ほか 2017），“同胞がいるためのいじめ”（水内・片岡 2015）も生じる。また、この時期から成人期にかけて、同胞が起こすトラブルのために困ったという体験も報告されている（小笠・黒澤 2014）。なお、Wardら（2016）によると、ASDの同胞の叩いたり叫んだりする行動は小学生のきょうだいを煩わせるが、中学・高校生になると以前のそのような経験を肯定的に理解するようになる。

小学生になったきょうだいは「社会の認識に対する拒否感」を感じ始める。例えば越智ら（2017）によれば、きょうだいは他人の目に対する嫌悪感と諦め、普段から行っていることを祖父母から褒められたことに対する違和感を抱くことがある（越智ほか 2017）。小笠・黒澤（2014）によれば、小学生以降のきょうだいには、きょうだいであるがゆえの納得できない思い、きょうだいならではの他人の言葉に引っかかる思いが見られる（小笠・黒澤 2014）。宮内・船橋（2014）も、小学生の時期とは特定されていないが、学校内で同胞に対する周囲の目を気にしたり、障害者を差別的に見る同級生の発言に嫌悪感を抱く例を示している。

以上のカテゴリ以外に困難と考えられるものとしては、次のようなものがある。片岡・水内（2015）によれば、“同胞のことが分からず悩んでいて、親にも聞けず、小学校の先生から教えてもらいたかった”というきょうだいいもいた。小笠・黒澤（2014）によれば、きょうだいは自分の要求を抑え我慢する態度を身につけたり、同胞の障害や家族との関係に対してあきらめの気持ちを抱いたりしている。

2.3. 中学・高校の時期に経験する困難

中学生や高校生の時期のきょうだいは、家で同胞と過ごす時間よりも、学校で友人と多くの時間を過ごすようになる。思春期に入って情緒的にも不安定な時期を迎える。Yang and Shin（2015）によれば、中学生や高校生にあたる時期には環境が拡大し、同年代との関係や学校生活で問題解決を図る傾向がある。山本（2005）によれば、高校生の頃から、きょうだいは親と社会が示すシナリオに反発し、自分自身のシナリオを作り始める。中学・高校の時期は、きょうだいにとって、背負ってきた役割への負担感や悩みを感じつつ、主体的に生きたいという意志を強く持つようになり、内面で葛藤する時期である。

この時期における主要な困難は、「友人との関係」「社

会の認識に対する拒否感」「同胞が将来に与える影響」などのカテゴリに分けられる。

「友人との関係」に関して、例えば同胞と同じ学校ではないことについて友人が聞いた時に答えられず困ったという体験（水内・片岡 2015）や、いついじめられるか分からないという心配（片岡・水内 2015）が見られる。相談相手について過去をふり返り、「昔は（相談する相手が）いなかった」と述べる成人のきょうだいが見られる（片岡・水内 2015）。

「社会の認識に対する拒否感」は、中学・高校以前の時期から続くものである。越智ら（2017）は、“障害のある人の家族として見る周りからの目”、“親しい友人からの何気ない一言へのやるせなさ”と怒り”を報告している。

中学生の時期に入ったきょうだいは、将来に対する心配をし始める。「同胞が将来に与える影響」として、小笠・黒澤（2014）は、中学・高校生の時期以降のきょうだいにおける、進路決定に対する同胞の存在の影響が見られること示している。また片岡・水内（2015）の研究では、きょうだい自身は自分の将来について“自分の好きなようにしたい”という気持ちがある一方、親からは“同胞の面倒を見てくれ”と言われて良い気分ではなかったという例も見られた。

以上のカテゴリ以外に困難と考えられるものとしては、次のようなものがある。家庭内では“祖父母との葛藤”が見られることもある。越智ら（2017）は、お互いに気を遣うことによるストレスや、同胞を“施設にやるのはしょうがない”という祖父母の言葉に対するやるせなさ”と怒りを報告している。越智らは、このほかにも、試験がない同胞を羨ましく思う反面、“同胞は大変なのだから羨ましく思っはいけない”という気持ち、突然同胞と暮らせなくなったことによる“同胞の施設入所に対する驚きと寂しさ”を報告している。小笠・黒澤（2014）は、思春期の心理的なゆれが同胞との関係に影響すること、中学生以降のきょうだいには“自分の葛藤を同胞のせいにしたくない”という思いがあることを示している。

2.4. 大学生・成人の時期に経験する困難

高校卒業後のきょうだいは、大学に進学したり社会人となったりし、同胞と距離的に分離されることも多い。この時期の主要な困難は、「友人等との関係」「きょうだいとしての責任感」「自分の将来のことを悩む」「同胞の将来のことを悩む」などのカテゴリに区分できる。

表1 各ライフステージにおいてきょうだいが経験する困難

幼児期	小学生の時期	中学・高校の時期	大学・成人の時期
親の接し方に関する差別 周囲からの期待 普通と違う 同胞の特性による困難	差別と羨望 周囲からの期待 普通と違う 同胞の存在から起因する 困難な経験 社会の認識に対する 拒否感	友人との関係 社会の認識に対する 拒否感 同胞が将来に与える影響	友人等との関係 きょうだいとしての責任感 自分の将来のことを悩む 同胞の将来のことを悩む

注：ライフステージ間で、内容面で類似が見られるカテゴリーを、同じ位置に配置した。例えば、「同胞の特性による困難」と「同胞の存在から起因する困難な経験」は類似しており、それらと一部類似が見られ、相互に類似する「友人との関係」「友人等との関係」を同じ位置に配置した。

「友人等との関係」に関して、18～24歳のきょうだいを対象とする伊藤・栗田（2017）の研究では、同胞のことを友人に話すことへのためらいがまだあり、同胞のことを話せる友人の数は少なく、そのような友人がほしいと感じているとの回答が多かった。Yang and Shin（2015）は、同胞との関係で担っていた保護的役割を社会生活や結婚相手との関係でもとりがちになること、子どもには自分とは違う人生を生きて欲しいという願いをもつことを報告している。

この時期のきょうだいは、「きょうだいとしての責任感」を抱えて生きようになる。小笠・黒澤（2014）は、この時期にきょうだいが同胞を養護する責務を強く意識することを示している。伊藤・栗田（2017）の研究では、“家から近い職場を選んだ”、“障害のある子や不登校の子を手助けできる小学校教員になりたいという気持ちが強まった”というきょうだいが見られた。また越智ら（2017）は、健全きょうだいとしての責任感や、社会人になるにあたって自立・転勤し同胞に会えないことの寂しさを報告している。

「自分の将来のことを悩む」というカテゴリーに関しては、きょうだいの結婚への同胞の影響（小笠・黒澤 2014）、自分が将来結婚するとき、同胞の障害を分かってくれる人や働いて収入を得てくれる人がよいなどの“結婚相手の条件”（越智ほか 2017）、結婚しようとする相手や相手の家族との関係についての不安（伊藤・栗田 2017）などが示されている。また、進路の選択において、自分が実家から離れてしまうと同胞の世話が大変になるから離れられないという“進路選択の制限”も見られる（越智ほか 2017）。

「同胞の将来のことを悩む」というカテゴリーに関しては、親亡き後の同胞に対する不安・心配（小笠・黒澤

2014）、同胞の生活場所や身体の弱さなどの“同胞の今後の体調・生活の心配”や障害者年金額の動向などの“同胞の将来の経済面の心配”（越智ほか 2017）が指摘されている。伊藤・栗田（2017）の研究でも、支えていきたい気持ちはあるが、体力面や金銭面の不安があるといった回答が多く、“母親がいなくなった時の同胞の想像がつかないから不安がある”というきょうだいも見られた。

成人期にきょうだいは、同胞への支援に対する必要性を感じ、同胞の将来を考え悩む（小笠・黒澤 2014）。この時期は、親亡き後のことを心配し、同胞の責任を負うことを具体的に考え、準備をする時期である。

3. 考察—各時期の困難を踏まえたきょうだいへの支援

これまで検討してきた、各時期における困難をまとめると、表1のようになる。以下、各時期の困難を踏まえた支援のあり方について、先行研究を参照しつつ考察を行う。

幼児期と小学生の時期にきょうだいが経験する困難には、共通性が見られる。これらの時期における主要な困難には、親の養育態度やきょうだいへの期待、家庭内で担う役割などと関連して、家庭生活で感じられる困難が含まれる。親が同胞の世話をすることに多くの時間を費やすため、きょうだいに注意を向けられない傾向が見られる。このことに対しては、同胞のレスパイトケアにより親ときょうだいと一緒にいる時間をもてるようにしたり、何らかの家族支援プログラムを提供したりすることが必要と考えられる。

小学1年から中学3年までのきょうだいに対する阿部・神名（2015）の研究によれば、親ときょうだいと一緒に

行う親子ふれあい遊びによって、きょうだいが親を独占する体験をもつことができ、不公平感や同胞への羨ましさなどの否定的感情の緩和に直接的な影響が見られた。このことは、きょうだいと親と一緒に過ごせることが、安定的な親子関係を強める情緒的支援となることを示している。また、それと同じ家族支援プログラムの中で、親に対してきょうだいとの接し方を具体的に学んでもらったりするスキルトレーニングを行った結果、「親が「優しく」「受容的」になった」ときょうだいが実感できるほど親の接し方が変化したケースが複数見られた（阿部・神名 2015）。

なお藤井（2006）は、幼児期のきょうだいの母親にとって重圧とならないように家族支援プログラムを実施することの重要性を指摘しており、また発達相談においては、母親が一人で頑張りすぎず子育てを楽しむ方向で取り組み、父親や親族、地域の人々の協力を得る方法について話し合うことなどの必要性を指摘している。

きょうだいは、自分と他の子どもの家庭生活の違いを幼児期から感じているが、小学生の時期には、同級生や友人との関係の中で、違いをより明確に感じ、場合によっては同胞がいるためにいじめを受けることもある。そのような状況の中で、小学生のきょうだいが親の会の活動に親と一緒に参加することや、親の会やきょうだい支援の会などによる「きょうだいの会」に参加することを通じてきょうだい同士で交流したり、個人的にきょうだい同士が友人になることも意味がある（藤井 2007）。Kim and Lee（2007）によると、障害児のきょうだい支援キャンプに参加した参加者において心理的負担感の低下が見られた。

また、中学・高校生の時期と大学生・成人の時期の間には、共通性が見られる。これらの時期にきょうだいを経験する主要な困難には、対人関係に関する悩みや将来についての悩みが含まれる。

対人関係に関して、友人に同胞のことを話すことへのためらいは、中学・高校の頃ばかりではなく大学・成人の時期にも見られる。友人に同胞のことを語りにくいきょうだいにとって、きょうだい会などのピア・サポートの機会が重要な意味をもつと考えられる。

中学・高校の時期のきょうだいは、きょうだい同士の集まりの必要性を感じ始め、親の同伴なしに「きょうだいの会」に参加することが可能になる（藤井 2007）。Lee and Lim（2014）によれば、きょうだいのためのプログラムへの参加経験の有無によって自尊感情には差がある。

阿部・小林（2012）によれば、イギリスにおいて、きょうだい支援プログラムに参加した18歳以下のきょうだいには、参加を通じて自尊感情の向上などが見られた。参加したきょうだいの感想としては、「まさに自分のためのグループ活動だった」、「同じ経験をしている仲間を知ることができて良かった」、「自分が同胞とどうつき合ったらよいか、いろいろなアイデアを得られた」などの感想が挙げられている。

成人したきょうだいにとっても、宮内・船橋（2014）によれば、同様の立場の人同士がそれぞれの経験や思いをそのまま受け止めることができる、「共有・共感できる場」が必要である。Arnoldら（2012）の研究においても、成人のきょうだいが必要とする主な支援ニーズとして、心を開いて話しができるサポートグループやきょうだい会のような「きょうだいサポート」に最も多くの人と言及している（53%）。

中学生の頃からきょうだいは将来に対する心配をし始め、大学生・成人期には同胞と自分の将来の問題について現実的に考え悩むようになる。Yang and Shin（2015）は、公的な支援が不足しているため、きょうだいにとって同胞が重荷になってしまうことを指摘している。さきにふれたArnoldら（2012）の研究においても、成人のきょうだいが必要とする主な支援ニーズとして、経済面や法律面の計画、財産の相続、同胞の後見人役割の親からきょうだいへの移行といった、将来に向けた計画を考えてゆくための支援である「将来計画」に言及する人も比較的多く見られた（31%）¹⁾。

社会の認識に対する拒否感をきょうだいは小学生や中学生のころから感じている。社会の認識を変えてゆく努力も、考えるべき支援の1つである。例えば、同胞のことを「友人には話しにくい」と言うきょうだいが見られることから、障害者を同胞に持たない子どもたちに障害に関する理解を深める機会を提供することが重要である（片岡・水内 2015）。

以上のように、きょうだいに対してライフステージごとに様々な支援がなされうるが、支援にあたっては、きょうだいをめぐる状況によって支援ニーズに違いがあることに留意すべきである。それを考慮せずに画一的な支援をきょうだいに提供することは、十分な効果が得られないだけでなく、きょうだいの側に不快感を生じさせる可能性がある。

例えば、山本（2005）の研究が示すように、同胞ときょうだいの年齢差や、親の認識のあり方などによって、遊

びや社会生活が制限される度合いや、母親ときょうだいが一緒に過ごす時間は異なり、同胞や家族への不満を感じるかどうかにも違いが出てくる。また、水内・片岡(2015)の研究が示すように、母親がきょうだい本人の意志を尊重したいと思うことも多く、きょうだい自身も必ずしも同胞のことを考慮して職業を選択しているとは限らない。越智ら(2017)の研究が示すように、きょうだいの結婚観に対して同胞の存在が影響を及ぼさない場合もある。

4. 結論

本研究は、先行研究に基づき、きょうだいが障害のある同胞とともに育つ過程の中で、各ライフステージにおいて経験する主要な困難を検討し、それらの困難に対応してどのような支援がなされるかを考察することを目的とした。各時期の主要な困難には、幼児期と小学生の時期の間で、また中学・高校の時期と大学生・成人の時期の間で類似点も見られるが、差異も見られた。各時期の主要な困難を踏まえた支援としては、幼児期や小学生の時期には親子関係に関連する支援の必要性が高く、中学・高校の時期以降は友人関係に関連する支援や将来計画に関連する支援も重要となる。ただし、それぞれのきょうだいの支援ニーズの差異に留意して支援を行うことが必要である。

注

- 1) Arnoldら(2012)の研究において、成人のきょうだいが必要とする主な支援ニーズとして「きょうだいサポート」と「将来計画」のほかに比較的多くの人が言及していたのは、カンファレンスやワークショップ、セミナーなどの「教育やトレーニングの機会」(35%)、親のみではなくきょうだいを含めた家族全体に支援がなされる「包括的家族支援」(34%)であった。

文献

- 阿部美穂子・神名昌子(2015)。「障害のある子どものきょうだいとその家族のための支援プログラムの開発に関する実践的研究」『特殊教育学研究』, 52(5): 349-358.
- 阿部美穂子・小林保子(2012)。「イギリスにおける障害のある子どものきょうだいの支援—支援プログラムの実際」『富山大学人間発達科学部紀要』, 7(1): 153-162.
- Arnold, C. K., T. M. Heller, and J. C. Kramer(2012). Support Needs of Siblings of People with Developmental Disabilities. *Intellectual and Developmental Disabilities*, 50(5): 373-382.
- 藤井和枝(2006)。「障害児者のきょうだいに対する支援(1)」『関東学院大学人間環境学会紀要』, (6): 17-32.

- 藤井和枝(2007)。「障害児者のきょうだいに対する支援(2) きょうだい同士の支援」『関東学院大学人間環境学会紀要』, (7): 17-33.
- 林志帆・住友雄資(2016)。「精神障害者のきょうだいへの支援—精神保健福祉士による支援内容から」『福岡県立大学人間社会学部紀要』, 24(2): 61-76.
- 伊藤美咲・栗田季佳(2017)。「障害児のきょうだいと健常児の兄弟の違い—障害児に対する見方との関連」『三重大学教育学部研究紀要 自然科学・人文科学・社会科学・教育科学・教育実践』, 68: 61-67.
- 片岡美彩・水内豊和(2015)。「自閉症スペクトラム障害児・者のきょうだいの生涯発達の諸相(第2報) 家族関係ならびにきょうだいの将来展望の視点から」『富山大学人間発達科学部紀要』, 10(1): 99-109.
- Kim, E. S. and M. I. Lee(2007). The Effect on the Non-Disabled Sibling's Self Concept and Burden through the Experience of Camp for Supporting Disabled Siblings. *Journal of Special Education*, 17, 89-108.
- Lee, S. Y. and J. Y. Lim(2014). The Effects of Parental Differential Treatment and Social Support on the Self-esteem and Internalized Problems among Adolescents with Siblings with Special Needs. *Korean Journal of Child Studies*, 35(2): 63-84.
- 水内豊和, 片岡美彩(2015)。「自閉症スペクトラム障害児・者のきょうだいの生涯発達の諸相(第1報) きょうだいと同胞との関係の視点から」『富山大学人間発達科学部紀要』, 10(1): 89-98.
- 宮内絢榮・船橋篤彦(2014)。「成人したきょうだいの語りを通して「障害」の検討: きょうだい支援の在り方に向けて」『障害者教育・福祉学研究』, 10: 41-45.
- 越智彩帆・越智文香・山下祥代・榎木暢子ほか(2017)。「重症心身障害児者のきょうだいが抱く思いの変容と周囲の人々との関係性について—青年期のきょうだいに対する聞き取り調査から」『Journal of Inclusive Education』, 3: 77-86.
- 小笠由加里・黒澤良輔(2014)。「知的障害者の同胞をもつ成人きょうだいの体験過程—きょうだい特有の課題への気づきに焦点を当てて」『徳島文理大学研究紀要』, 88: 11-16.
- Seltzer, M. M., J. S. Greenberg, M. W. Krauss, R. M. Gordon et al.(1997). Siblings of Adults with Mental Retardation or Mental Illness: Effects on Lifestyle and Psychological Well-Being. *Family Relations*, 46(4): 395-405.
- 田倉さやか(2012)。「障害児者のきょうだいの心理的体験と支援」『障害者問題研究』, 40(3): 18-25.
- 田中智・高田谷久美子・山口里美(2011)。「障がいをもつ人のきょうだいがとらえる同胞の存在についての認識」『山梨大学看護学会誌』, 9(2): 53-58.
- 立山清美・立山順一・宮前珠子(2003)。「障害児の「きょうだい」の成長過程に見られる気になる兆候—その原因と母親の「きょうだい」への配慮」『広島大学保健学ジャーナル』, 3(1): 37-45.
- Taylor, J. L. and R. M. Hodapp(2012). Doing Nothing: Adults with

Disabilities with No Daily Activities and Their Siblings. *American Journal on Intellectual and Developmental Disabilities*, 117(1): 67-79.

戸田竜也 (2012). 「障害児者のきょうだいの生涯発達とその支援」『障害者問題研究』, 40 (3) : 10-17.

山本美智代 (2005). 「自分のシナリオを演じる：同胞に障害のあるきょうだいの障害認識プロセス」『日本看護学会誌』, 25 (2) : 37-46.

Yang, H. J. and J. S. Shin (2015). Lived Experience of Female Siblings of Persons with Disabilities: Applying Giorgi's Phenomenological Method of Analysis. *Journal of Emotional & Behavioral Disorders*, 31(1): 17-49.

Ward B, B. S. Tanner, B. Mandelco, T. T. Dyches et al. (2016). Sibling Experiences: Living with Young Persons with Autism Spectrum Disorders. *Pediatric Nursing*, 42(2): 69-76.